

2-3 死と自殺に対する態度価値の低い看護大学生の人生の意味・目的意識 —PIL(Purpose In Life)Test を手掛かりに—

○山元 恵子 (梅花女子大学)、平松 正臣 (関西福祉大学)、藪脇 健司 (吉備国際大学)
深津 孝雄 (電気通信大学)、山口 浩 (岩手大学)

I. はじめに:

人は運命的、不条理なものである病気や苦しみ、死に対してどのような態度価値を持って臨むかによって、その人自身の生き方に影響を与え、他者への関わり方も変化する¹⁾。では、援助職を志す看護大学生自身は人生に対してどのような態度価値を持っているのか。「態度価値」とは、Purpose In Life Test(以下、PILテスト)の分析方法の中の一つの局面で、「死生観」、「病気苦悩観」、「自殺観」の3評価項目を含み、合計点が態度価値局面の得点になる。菊池²⁾の看護学生学年別PIL得点を参考にPILテスト分析内容を探索的に検討したところ、看護大学生の中で自殺を真剣に考えたことがある学生が多く存在した。

II. 研究目的

1. PartA16項目1,2段階について、看護学部大学生と社会福祉学部大学生を比較し、「自殺観」への態度価値を明らかにする。2. 看護大学1,2回生(PartA16項目1,2段階)の「態度価値の局面」(PILテストB・C分析)とそれに関連する項目についての分析を行い、死と自殺に対する態度価値の低い学生の傾向を知り、看護大学生の基本的心性を育む資料とする。

III. 研究方法

1. 対象者: 1) A県B大学看護学部1,2回生に調査の趣旨を説明し、協力を得られた1回生83名(年齢18~19歳,女性のみ),2回生67名(年齢19~20歳,女性のみ,社会人1名含む)

2) P県A大学社会福祉学部3回生120名,看護学部3回生74名 1) 2) ともに無記名

2. 調査期間: 1) 2011年11月 2) 2011年1月

3. 調査方法: PILテストを実施し、研究に同意した学生のみ回収箱に投函するよう説明した。

PILテストとは、Frankl, V. E(1905-1997)のロゴセラピー³⁾の考えに基づいてCrumbaugh, J. C. らによって人生の意味・目的意識を測定する道具として考案された心理検査である。目的1. は、社会福祉学部と看護学部で、自殺を考える割合に差があるか χ^2 検定を行い対比させた。目的2では、PartA16項目(1,2段階)の学生を選択し、当該学生のPartB・C部分をPILマニュアルに沿って点数化するとともに、PILデータの中から人生の意味・目的意識の「態度価値の局面PartB(9, 11, 13)」と関連するPartA(15, 16, 6, 11)を抜粋し検討を加えた。

4. 梅花女子大学倫理審査委員会に申請し、承認を受けてから実施した(承認番号:0010,0015)。

IV. 結果と考察

1. 社会福祉3回生n=120(考えた12,ない54)よりも看護1~3回生n=227(考えた54,ない103)で看護大学生の方が自殺を本気で考えたことのある者が有意に多かった(p<0.05)。

2. 自殺を本気で考えた看護大学1・2回生37名は、(1)死はこわくない群(5名14%) (2)死はまあまあこわい群(23名62%), (3)死はこわい群(9名24%)の3群に分かれた。

3. 生まれてこない方がよかった(1)群2名40%, (2)群3名13%, (3)群3名33%で、なぜ生きているのかわからなくなる(1)群4名80%, (2)群11名48%, (3)群3名33%だった。

4. (1)死はこわくない群は、他の群に比較して、自分の存在の意味について見失うことが多い群と考えられるので、個別支援の必要がある。

文献

1)佐藤文子, 田中弘子(1989): 死と自殺に対する態度についての心理学的研究—Purpose-in-life-test (PIL)を手がかりに—, *Artes Liberales*, 44, 59-77.

2)菊池和子(2001): 看護学生の人生の意味・目的意識—PIL テストの分析より—, 岩手県立大学看護学部紀要 Vol. 3, 1-7.

3)ロゴセラピー (Logotherapy) とは、人が自らの「生の意味」を見出すことを援助することで心の病を癒す心理療法のこと。創始者は神経科医で精神医学者のヴィクトール・E・フランクル。

4)本研究は、2011年度梅花学園研究助成によるものである。